

29年センター試験 ビジュアルデータ分析

“基幹3教科”平均点合計(600点満点)

「国語＋数学(I・A＋II・B)＋英語」は、
5.6点ダウンの341.6点(得点率 56.9%)!

- 国語-22.4点、数学I・A+5.8点、数学II・B+4.2点、英語+6.9点
- 平均点：生物基礎“過去最高”／化学・物理基礎・日本史A“過去最低”
- 受験者：地歴“増”／公民“微減”／理科「基礎科目」“増”・「発展」“減”

旺文社 教育情報センター 29年2月

29年センター試験は前年に引き続き、全教科・科目の現行課程対応2回目として29年1月14日(土)・15日(日)本試験、1週間後に追・再試験が実施された。志願者数57万5,967人(前年比2.2%増)、受験者数54万7,892人(同2.1%増)で、ともに2年連続の増加である。

大学入試センターから発表された実施結果を基に、過去のデータも含めてセンター試験の実施結果を様々な角度から分析し、以下にビジュアルデータとしてまとめた。

■「教科・試験枠」別の受験選択率

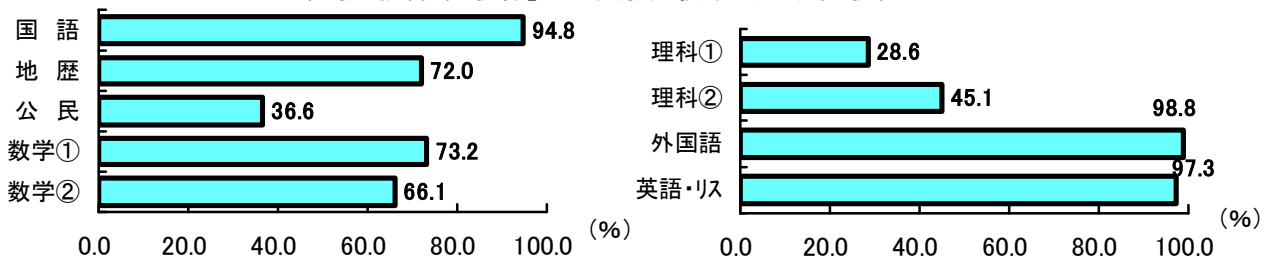
◎ 各「教科・試験枠」別の受験者数の全受験者数(54万7,892人。追・再試験含む実数)に占める割合(受験選択率=各「教科・試験枠」受験者数÷全受験者数×100)をみる。

例年、センター試験(以下、セ試)受験者のほとんどが受験する外国語(筆記)受験者は54万1,335人で、受験選択率は98.8%、英語のリスニングは97.3%。国語は94.8%であった。

27年からの現行課程先行実施で大きく変わったセ試「理科」の科目構成は、理科4領域において、それぞれ「基礎を付した科目」(標準2単位：以下、「基礎科目」)4科目と「基礎を付していない科目」(標準4単位：以下、「発展科目」)4科目の計8科目からなる。「基礎科目」は理科①の試験枠に配置され、「発展科目」は理科②の試験枠に配置されている。

現行課程3回目となる理科①(基礎科目)の受験者数は約15万7,000人(前年比2.6%増)で、セ試全受験者数に占める受験選択率は28.6%／理科②(発展科目)の受験者数は約24万7,000人(前年比1.3%減)、受験選択率45.1%である。「基礎科目」の受験者数は前年に引き続き増え、受験選択率もアップしたものの、受験選択率は27年の実施開始以降、3年連続、全「教科・試験枠」中で最も低い。

●センター試験「教科・試験枠」別の受験選択率(追・再試験含む)



注. ① 「教科・試験枠」別の受験選択率=各「教科・試験枠」受験者数÷全受験者数×100。
 ② 各「教科・試験枠」の受験者数は実受験者数。全受験者数は547,892人。
 ③ 理科①は「基礎科目」、理科②は「発展科目」。／ ④ 外国語は英語を含む筆記試験、「英語・リス」は英語のリスニング。

■ 基幹3教科の平均点合計

◎ セ試平均点には地歴、公民、理科「発展科目」における各科目の「第1解答」（100点満点）と「第2解答」（100点満点）の得点、理科「基礎科目」（50点満点）の“2科目受験必須”の得点が混在し、それらの教科における各科目の平均点の実態は把握しにくい。

そのため、平均点の動向をみる一つの視点として、国公立大の文系・理系に共通の“基幹3教科”である国語、数学、英語の平均点合計を大学入試センターから発表された科目別平均点等の「確定値」を基に算出した。

国語／数学(数学Ⅰ・A＋数学Ⅱ・B)／英語の平均点合計(600点満点)は、次のとおり。

国語＋数学(数学Ⅰ・A＋数学Ⅱ・B)＋英語＝341.6点(得点率56.9%)

<前年差：得点＝－5.6点、得点率＝－0.9ポイント>

■ 「5教科6科目」の加重平均点

◎ 国公立大受験のセ試科目の標準の目安となる、文系・理系に共通な「5教科6科目」（国語／地歴・公民<合わせて1科目>／数学<数学①と数学②の2科目>／理科<理科①・理科②合わせて1科目>／外国語）の加重平均点(800点満点)を算出した。

29年の結果は、次のとおりである。

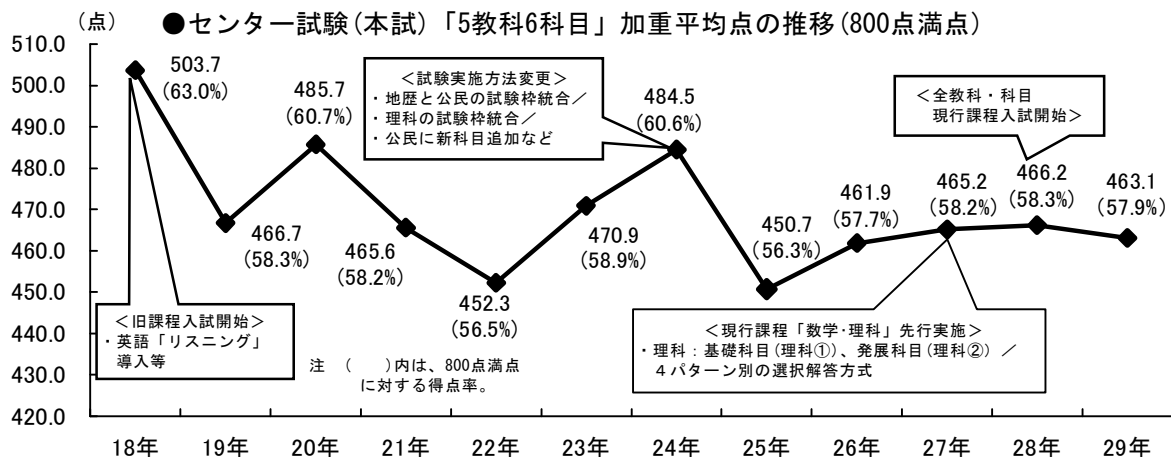
「5教科6科目」(800点満点)＝463.1点(得点率57.9%)

<前年差：得点＝－3.1点、得点率＝－0.4ポイント>

これまでのセ試「5教科6科目」の加重平均点の推移をみると、学習指導要領改訂に伴う出題教科・科目や内容等の変更、実施方法の変更などの初年度は、概して平均点は高めになる傾向がある。

前回の新課程入試(18年。英語にリスニング導入など)の「5教科6科目」加重平均点は503.7点(800点満点：得点率63.0%)と、この10年余りの間では最も高い。24年の実施方法等の大幅変更(地歴・公民、理科の試験枠統合、公民に新科目設置など)の際は、484.5点(同60.6%)であった。27年の現行課程「数学・理科」先行実施では、理科の実施方法が複雑・多様化され、平均点は465.2点(同58.2%)に留まり、さほど上昇しなかった。

また、28年の全教科・科目の現行課程による全面実施でも前年より1.0点アップの466.2点(同58.3%)に留まった。



注. 大学入試センター発表の各科目別平均点と受験者数(本試験。理科「基礎科目」は追・再試験含む)から算出。国語(200点満点)の平均点／地歴と公民を合わせて1教科・1科目とした加重平均点(100点満点)／数学①の加重平均点(100点満点)／数学②の加重平均点(100点満点)／理科①と理科②の加重平均点(100点満点)。「基礎科目」<50点満点>は2科目受験者<100点満点：追・再試験含む>の加重平均点)／外国語の加重平均点(200点満点)を合計(800点満点)。18年と27年は旧課程対応の「経過措置」科目(旧課程科目)含む。27年は「得点調整」後の平均点。

平成29年度 大学入試センター試験(本試験) 平均点等一覧[確定]

<平成29年2月2日 大学入試センター発表>

教科	科目	平成29年		平成28年		前年差		
		受験者数	平均点	受験者数	平均点	受験者数	平均点	
基幹3教科 平均点合計(600点満点) 【国語+数学Ⅰ・A+数学Ⅱ・B+英語(200点換算)】		— (得点率)	341.6 56.9%	— (得点率)	347.2 57.9%	— (得点率差)	▲ 5.6 ▲0.9ポイント	
国語(200点)	国語	519,129	107.0	507,791	129.4	11,338	▲ 22.4	
地理歴史・公民	地理歴史(100点)	世界史A	1,329	42.8	1,449	42.1	▲ 120	0.8
		世界史B	87,564	65.4	84,131	67.3	3,433	▲ 1.8
		日本史A	2,559	37.5	2,472	40.8	87	▲ 3.3
		日本史B	167,514	59.3	160,830	65.6	6,684	▲ 6.3
		地理A	1,901	57.1	1,805	52.1	96	4.9
		地理B	150,723	62.3	147,929	60.1	2,794	2.2
	公民(100点)	現代社会	76,490	57.4	80,240	54.5	▲ 3,750	2.9
		倫理	22,022	54.7	26,039	51.8	▲ 4,017	2.8
		政治・経済	54,243	63.0	49,184	60.0	5,059	3.0
		倫理、政治・経済	50,486	66.6	48,709	60.5	1,777	6.1
数学	数学①(100点)	数学Ⅰ	6,156	34.0	5,981	36.5	175	▲ 2.5
		数学Ⅰ・数学A	394,557	61.1	392,479	55.3	2,078	5.8
	数学②(100点)	数学Ⅱ	5,971	25.1	5,782	27.8	189	▲ 2.7
		数学Ⅱ・数学B	353,836	52.1	353,423	47.9	413	4.2
		簿記・会計	1,482	49.8	1,401	57.7	81	▲ 7.9
		情報関係基礎	524	54.9	539	56.2	▲ 15	▲ 1.3
理科	理科①(50点)	物理基礎	19,406	29.7	18,304	34.4	1,102	▲ 4.7
		化学基礎	109,795	28.6	105,937	26.8	3,858	1.8
		生物基礎	136,170	39.5	133,653	27.6	2,517	11.9
		地学基礎	47,506	32.5	47,092	33.9	414	▲ 1.4
	理科②(100点)	物理	156,719	62.9	155,739	61.7	980	1.2
		化学	209,400	51.9	211,676	54.5	▲ 2,276	▲ 2.5
		生物	74,676	69.0	77,389	63.6	▲ 2,713	5.4
		地学	1,660	53.8	2,126	38.6	▲ 466	15.1
外国語(200点)	英語	筆記(200点)	540,029	123.7	529,688	112.4	10,341	11.3
		リスニング(50点)	532,627	28.1	522,950	30.8	9,677	▲ 2.7
		筆+リ(200点換算)	—	121.5	—	114.6	—	6.9
	ドイツ語	116	128.7	147	130.9	▲ 31	▲ 2.3	
	フランス語	134	142.6	140	151.0	▲ 6	▲ 8.4	
	中国語	558	164.9	482	158.0	76	6.9	
	韓国語	185	129.0	174	128.1	11	0.9	

<注>

- ① 英語の平均点(200点)は、「筆記」(200点) + 「リスニング」(50点)の250点満点を200点に圧縮換算。
- ② 大学入試センター発表の科目別平均点は小数第2位の表示だが、旺文社では小数第1位で表示。
- ③ 表中の「平均点対前年差」は、四捨五入の関係で「29年-28年」と一致しない場合もある。
▲印は「ダウン」(平均点)、および「減」(受験者数)を示す。
- ④ 地歴(各B科目間)、公民(「倫理、政治・経済」除く、各科目間)、理科②(発展科目間)における得点調整は、「生物」-「化学」の17.0点が最大で、実施されなかった。

旺文社 教育情報センター(平成29年2月2日)



■ **英語**; 筆記 +11.3 点、リスニング -2.7 点で、「筆記+リスニング」は 6.9 点アップ/
受験者数(筆記)は約 1 万人増で、14 年ぶりに 54 万人超!

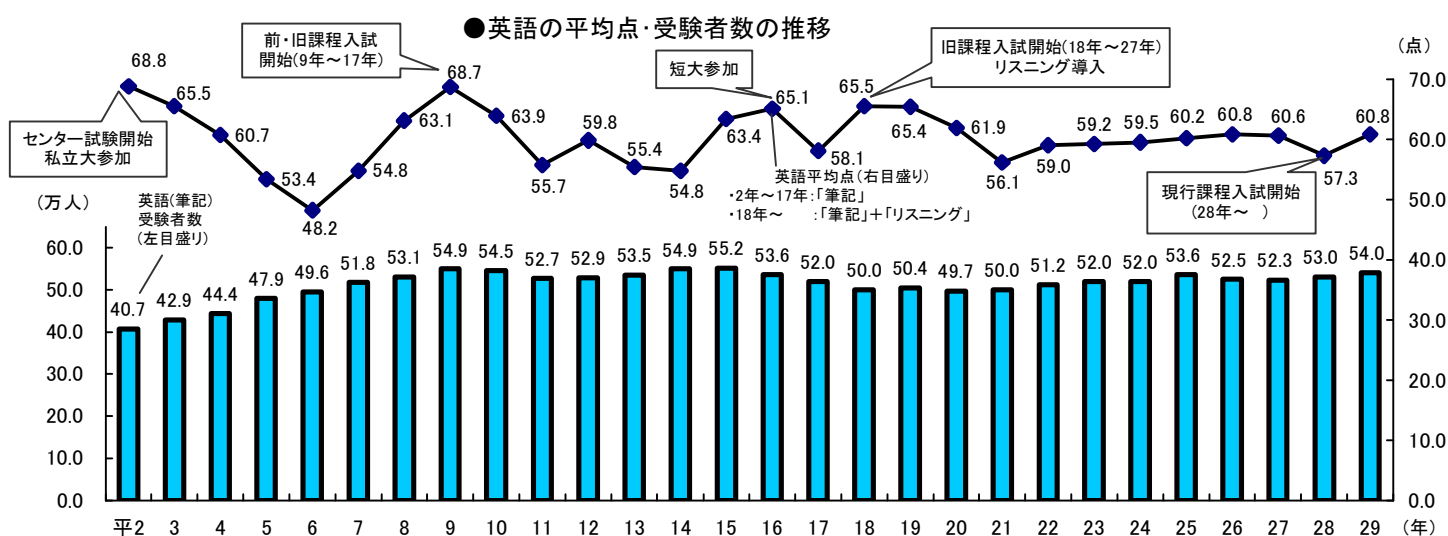
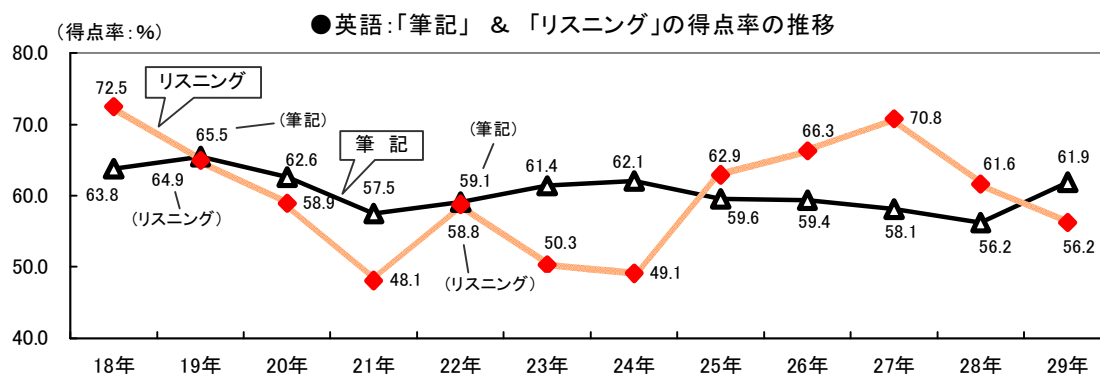
◎ 29 年の英語の平均点は筆記が 11.3 点アップ、リスニングが 2.7 点ダウンし、全体(筆記+リスニング:250 点満点を 200 点満点に圧縮換算)では 6.9 点アップの 121.5 点だった。

平成 2(1990)年のセ試開始から 29 年までの英語の平均点(2 年~17 年までは筆記のみ、18 年以降は筆記+リスニング)の推移をみると、6 年に過去最低の 96.4 点(得点率 48.2%)を記録した後、V 字回復で得点率は概ね 5 割台半ば~6 割台を推移。25 年~27 年は 6 割を維持したが、28 年は割り込んだ。29 年は 121.5 点(同 60.8%)で、5 年ぶりに 6 割台を回復。

◎ 最近の筆記は、24 年の 124.2 点(得点率 62.1%)以降、28 年の 112.4 点(同 56.2%)まで 4 年連続ダウンしたが、29 年は 123.7 点(同 61.9%)で 5 年ぶりにアップした。

一方、リスニングは、18 年の導入時に平均点 36.3 点(50 点満点、得点率 72.5%)の高得点を示した後、21 年の 24.0 点(同 48.1%)まで 3 年連続で急降下。最近では 27 年の 35.4 点(同 70.8%)から 2 連続ダウンして 29 年は 28.1 点(同 56.2%)だった。

◎ 例年、セ試受験者数で最も多い筆記の受験者数は、15 年の約 55 万 2,000 人をピークに 28 年まで 50 万人前後~53 万人台で推移していた。29 年は前年より約 1 万人(2.0%)多い 54 万 29 人で、14 年ぶりに 54 万人を超えた。



注. ① 折れ線グラフは、平成2年~17年における「筆記」(200点満点を100点満点に換算)の平均点、18年以降における「筆記」(200点満点)+「リスニング」(50点満点)の平均点(250点満点を100点満点に圧縮換算)を表示。 ② 棒グラフは、「筆記」の受験者数を表示。

■国語;平均点は-22.4点の大幅ダウンで、2年ぶりに得点率50%台に急落!

◎ 例年、セ試では英語に次いで受験者の多い国語について、9年～29年の平均点(200点満点を100点満点に換算)と受験者数、及び共通1次試験も含めた得点率の推移を下図に示した。

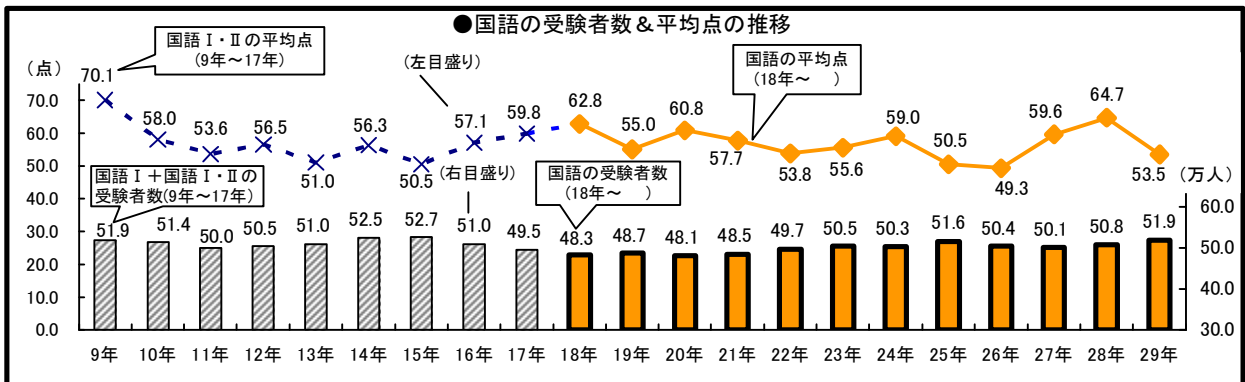
◎ 9年の国語I・II(9年～17年までは、国語Iと国語I・IIの2科目。受験者数は圧倒的に国語I<国語I・II)の平均点は140.2点と高得点であったが、10年には大幅にダウン。その後は100点台～110点台のアップ・ダウンを繰り返し、15年には101.1点の低得点を記録。

24年は得点率を60%直前まで回復していたが、25年は現代文の難化で、それまでの最低点(15年の101.1点)より若干低い101.0点となった。26年は、古文の難化などで平均点は98.7点まで下降。共通1次試験(昭和54<1979>年～平成元年<1989>年:11回実施)とセ試(平成2年～)を通して初めて平均点が50%を割り、過去最低となった。

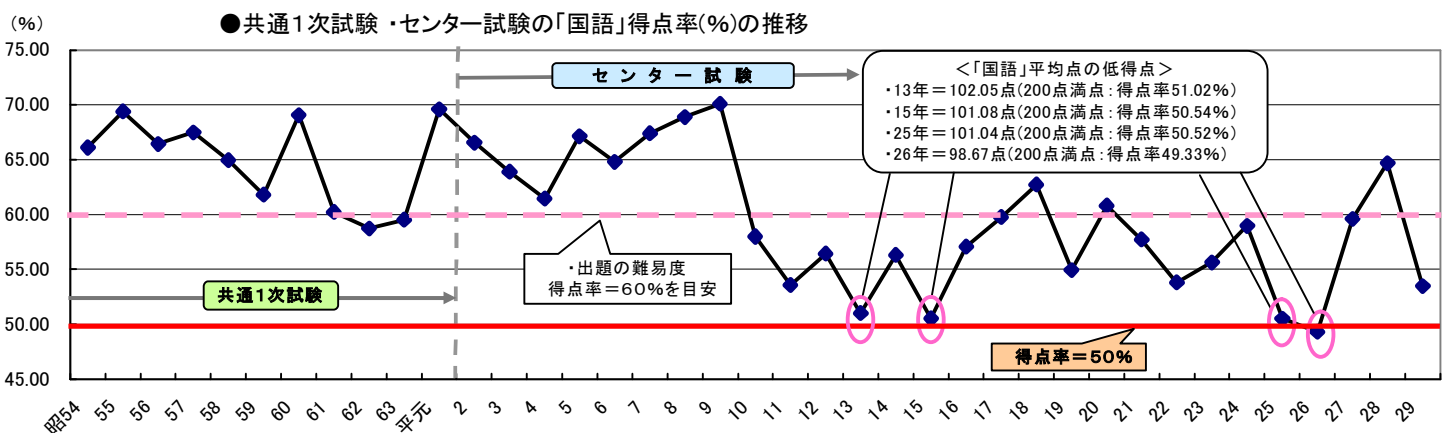
◎ 27年は得点率が59.6%に上昇し、28年は得点率64.7%と、8年ぶりに60%台に達した。しかし、29年は平均点が前年より22.4点の大幅ダウンとなり、得点率も53.5%に下降。

◎ 国語の得点率は、概して「共通1次」時代と「セ試」時代の前半(平成9年まで)はほぼ60%以上(昭和62・63年はわずかに60%割れ)の高得点率、それ以降は、ほぼ50%台半ば～後半で推移。しかし、最近は、25・26年の急落、27・28年のV字回復、29年の急落といった、平均点の激しいアップ・ダウンが目立つ。

因みに、「共通1次」時代における国語の得点率の平均は64.9%で、得点率60%未満の試験は11回中、2回のみである。一方、「セ試」時代の国語の得点率の平均は29年時点で61.3%となり、得点率が60%未満だった試験は28回中、17回に及ぶ。



注1. 前・旧課程入試(9年～17年)は、国語I及び国語I・IIの2科目出題。旧課程(18年～27年)及び新課程(28年～)入試では、国語1科目のみの出題。
2. 200点満点を100点満点に換算。



注 ① 「国語」平均点の得点率を示す。 ② 昭和54(1979)年～平成元(1989)年は「共通1次試験」、2年以降は「センター試験」。
③ 9年～17年の前・旧課程入試では、「国語I」「国語I・国語II」の2科目出題。ここでは、「国語I・国語II」の得点率を示す。

(年)

■**数学**; 数学Ⅰ・Aの平均点は+5.8点の61.1点、数学Ⅱ・Bは+4.2点の52.1点！

◎ 数学は27年から現行課程に沿って先行実施され、出題範囲・内容は現行課程の学習指導要領に対応して変更されたが、平均点等の経年比較は新・旧課程の同一名称の科目間でみる。

ただ、27年の「経過措置」による旧課程「数学」の平均点は除く。

セ試開始(2年)以降、29年までの28回に及ぶ数学Ⅰ・A(2年～8年までは旧・数学Ⅰ)と、数学Ⅱ・B(2年～8年までは旧・数学Ⅱ)との平均点の推移を下図に示した。

◎ 数学Ⅰ・A(旧・数学Ⅰ含む。以下、同)のこれまでの最低点は22年の49.0点で、セ試開始以降初めて5割を割った。最高点は12年の73.7点で、最高点と最低点との較差は24.7点。

一方、数学Ⅱ・B(旧・数学Ⅱを含む。以下、同)の最低点をみると、現行課程初年度となった27年の39.3点、最高点は6年の77.2点で、その較差は37.9点に達する。

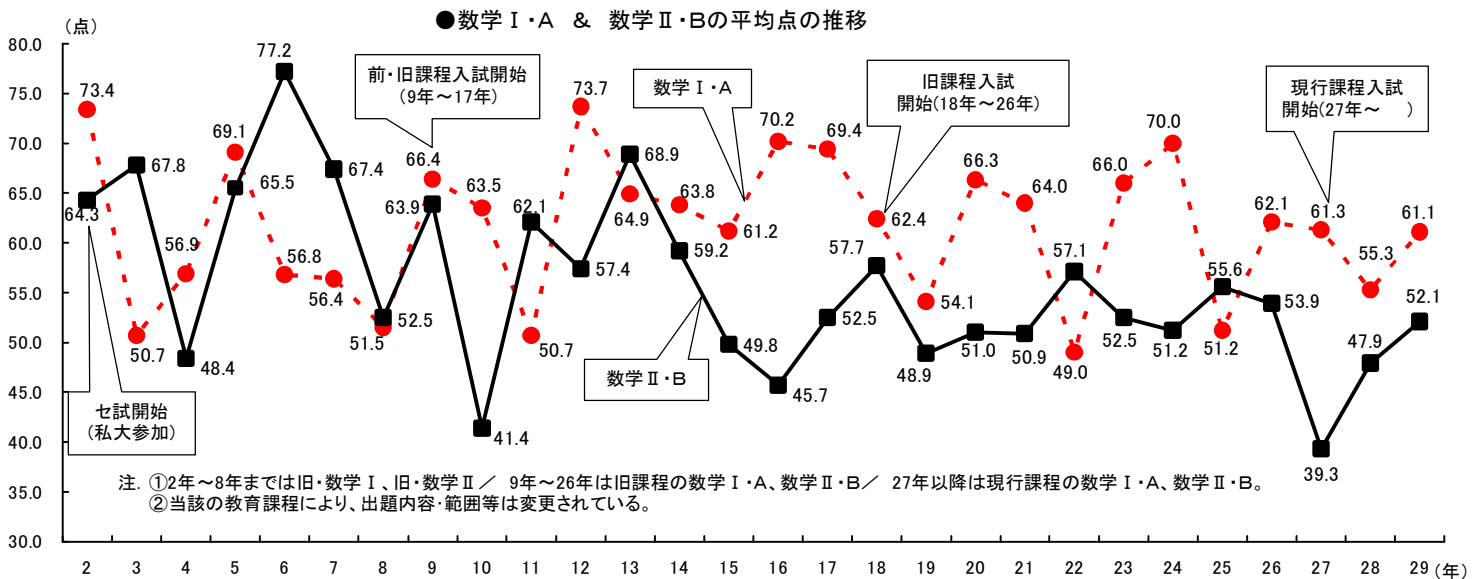
◎ 数学Ⅱ・Bの平均点は29年も含め、過去28回の試験(本試験)で50点未満が7回もあって変動幅も大きいのに対し、数学Ⅰ・Aの平均点50点未満は22年の1回のみである。

数学Ⅱ・Bは出題範囲が広く、応用問題も出題しやすいため、数学Ⅰ・Aに比べ、難易や問題量などによって不安定な平均点を示しているとみられる。

◎ 最近の数学Ⅰ・Aの平均点は、22年にこれまで唯一の50点割れとなった49.0点まで急落し、13年以来9年ぶりに数学Ⅱ・Bを下回った。その後、23年・24年と2年連続上昇して数学Ⅱ・Bを上回った。25年は大幅ダウンで数学Ⅱ・Bを下回ったが、26年は大幅アップ、27年・28年は2年連続ダウンしたものの、29年のアップによって4年連続で数学Ⅱ・Bを上回った。

一方、数学Ⅱ・Bは、22年に数学Ⅰ・Aを上回ったが、23年・24年と2年連続ダウンした。25年は3年ぶりに上昇して数学Ⅰ・Aを上回ったが、26年・27年ともダウンして数学Ⅰ・Aを下回った。特に、27年は平均点39.3点と、過去最低であった。28年は8.6点アップで平均点は47.9点、29年も4.2点アップの52.1点と2年連続アップしたが、数学Ⅰ・Aの平均点を上回るまでには至らなかった。

因みに、数学Ⅰ・Aと数学Ⅱ・Bの平均点差は27年の22.0点差(数学Ⅰ・A>数学Ⅱ・B)から、29年は9.0点差まで縮小した。



□数学2科目受験は、「数学Ⅰ・A + 数学Ⅱ・B」が約35万3,000人で、2科目受験者の97.9%！

◎ 29年の数学(数学①と数学②)の実受験者数は40万2,093人。そのうち、「1科目受験者」数は4万1,185人(実受験者数に占める構成率10.2%)、「2科目受験者」数は36万908人(同89.8%)である。

他方、数学①と数学②の延べ受験者数は76万3,001人。そのうち、数学①の「数学Ⅰ・A」の受験者数は39万4,793人(延べ受験者数に占める構成率51.7%)、数学②の「数学Ⅱ・B」の受験者数は35万4,066人(同46.4%)である。

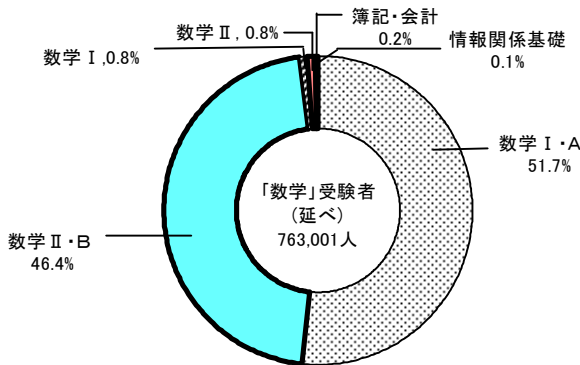
また、数学①と数学②の「2科目受験者」(実受験者数36万908人)のうち、97.9%を占める35万3,267人が「数学Ⅰ・A+数学Ⅱ・B」を受験している。

◎ ところで、数学は国公立大入試において、理系のみならず、文系にとっても基幹教科であり、上記のように「数学Ⅰ・A」と「数学Ⅱ・B」が主体となっている。

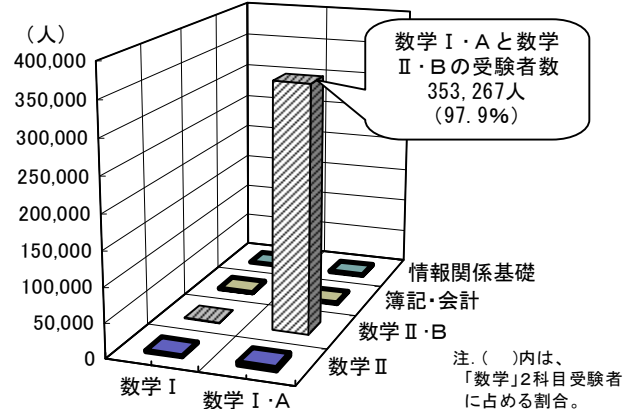
因みに、29年セ試受験者数の多い科目をみると、「英語(筆記)」約54万人／「英語(リスニング)」約53万3,000人／「国語」約51万9,000人／「数学Ⅰ・A」約39万5,000人／「数学Ⅱ・B」約35万4,000人となっており、この後に理科や地歴、公民が20万人台以下で続いている。

なお、前年まで出題されていた「工業数理基礎」(28年は旧課程履修者のみ受験可能。受験者4人)は、29年から出題されなくなった。

●「数学」延べ受験者の構成比(追・再試験含む)



●「数学」2科目受験者の内訳(追・再試験含む)



●「数学」2科目受験者：360,908人の内訳

数 学	①	数 学 ②			
		数学Ⅱ (人)	数学Ⅱ・B (人)	簿記・会計 (人)	情報関係基礎 (人)
	数学Ⅰ	1,632 (0.5%)	566 (0.2%)	260 (0.1%)	55 (0.0%)
	数学Ⅰ・A	4,269 (1.2%)	353,267 (97.9%)	482 (0.1%)	377 (0.1%)

注：()内は、「数学」2科目受験者に占める割合。

■ **地歴・公民**；「地歴」B科目は日本史・世界史平均点“ダウン”、「公民」全科目“アップ”
 [地歴、公民]2科目受験者は約1,300人(0.9%)“増加”の約14万7,000人！

□ **地歴と公民の受験者動向等**

◎ **地歴・公民の試験枠**

地歴と公民の試験枠は統合されており、[地歴、公民]([])は試験枠を示す。以下、同の全10科目から最大2科目の選択が可能である。

ただし、日本史Aと日本史Bなど、同一名称を含む科目同士の組合せ・選択はできない。

◎ **平均点“アップ”は地理B・倫政経など、“ダウン”は日本史B・世界史Bなど**

地歴の平均点は、地理B+2.2点(得点62.3点)、日本史B-6.3点(同59.3点)、世界史B-1.8点(同65.4点)など、受験者の多い“B科目”は地理がアップしたものの、日本史・世界史はダウンした。

公民は、国立難関大の入試科目に多くみられる「倫理、政治・経済」(以下、倫政経。4単位相当。他の公民科目は2単位)が+6.1点(同66.6点)と大幅にアップしたほか、前年ダウンした現代社会が+2.9点(同57.4点)、同様に前年ダウンの倫理が+2.8点(同54.7点)となり、政治・経済も+3.0点(63.0点)で、公民は全科目で平均点アップとなった。

● **日本史Aの平均点＝過去最低**：29年セ試「日本史A」(平成9年から出題)の平均点37.5点は、28年の40.8点を3.3点下回り(得点率：初の3割台)、過去最低となった。

◎ **地歴の受験者数は約1万2,000人(3.2%)“増加”、公民は約400人(0.2%)“減少”！**

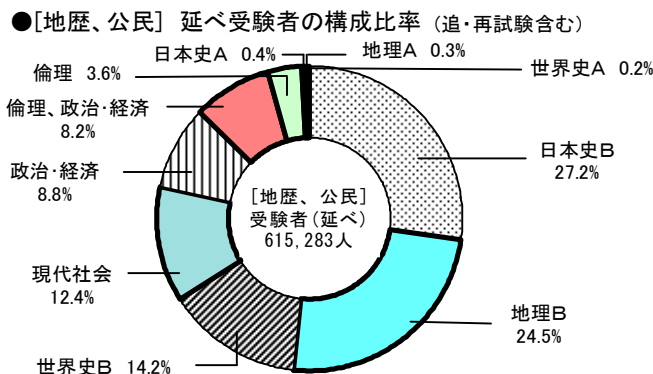
セ試の全受験者数(54万7,892人。追・再試験含む)が28年より2.1%増加した中、地歴の実受験者数(追・再試験含む)は、28年より1万2,376人(前年比3.2%)増の39万4,456人。全受験者数に占める地歴の「受験選択率」は、28年より0.8ポイント上昇の72.0%である。

他方、公民の受験者数は、28年より401人(同0.2%)減の20万633人だった。なお、地歴と公民の延べ受験者数は、28年より1万2,415人(同2.1%)増の61万5,283人である。

◎ **倫理の受験者数“大幅減”は、平均点下降・低得点傾向への“敬遠”！**

公民の受験者数減は、倫理の4,017人減(前年比15.4%減)と現代社会の3,750人減(同4.7%減)が要因である。

特に、これまで公民の中で与しやすい科目とみられていた倫理が、最近では平均点ダウンと低得点傾向(26年60.9点→27年53.4点→28年51.8点)が続いたことなどから、倫理を敬遠したとみられる。



◎「第1解答科目」と「第2解答科目」

地歴、公民の試験枠である[地歴、公民]、及び理科「発展科目」の試験枠である理科②では、それぞれ最大2科目の選択・受験が可能である。

志望大学のセ試利用が“1科目利用指定”である場合、当該受験生は“本命1科目”に絞って「2科目選択・受験」(2科目試験枠)を「事前登録」し、“本命1科目”の解答に最大2倍近い解答時間(120分程)を掛けることが可能である。つまり、2科目受験者は「第1解答科目」の解答時間を、「第2解答科目」(本命科目)の解答に充てることもできる。

こうした、解答時間の“不公平”を是正する観点から、全ての国立大と大半の公立大、一部のセ試利用私立大では、“2科目試験枠”の受験者が“1科目利用指定”の学部等に出願した場合、「高得点科目」ではなく、「第1解答科目」の成績を合否判定に用いる。

□ [地歴、公民]“2科目受験”の状況

◎ 地歴と公民の2科目の実受験者数(追・再試験含む)は、28年より1,256人(前年比0.9%)増の14万6,518人である。2科目受験者の増加は、セ試受験者の増加に加え、文系志向の堅調さがうかがえる。

試験枠[地歴、公民]の10科目(地歴A=3科目、地歴B=3科目、公民=4科目)から2科目を選択・受験する組合せは、全部で40通り(同一名称を含む組合せを除く)になる。

この40通りを地歴と公民の2教科の組合せで大別すると、次の3パターンになる。

(1)「地歴」1科目 + 「公民」1科目受験：約12万6,000人、86.2%

「地歴」1科目と「公民」1科目の組合せによる2科目受験者(実受験者。以下、同)は、28年より822人(前年比0.7%)増の12万6,287人([地歴、公民]2科目受験者に占める割合86.2%)で、2科目受験者の9割近くを占める。このタイプの組合せは、24通りになる。このうち、「地歴B」と「公民」の受験が12万4,455人(同84.9%)で、圧倒的に多い。

科目別の組合せでは、日本史Bと現代社会の組合せが2万6,805人(同18.3%)／日本史Bと倫政経の組合せが1万7,102人(同11.7%)／日本史Bと政治・経済の組合せが1万7,424人(同11.9%)などとなっている。

①「地歴B科目」×「公民」受験：124,455人(84.9%)の内訳

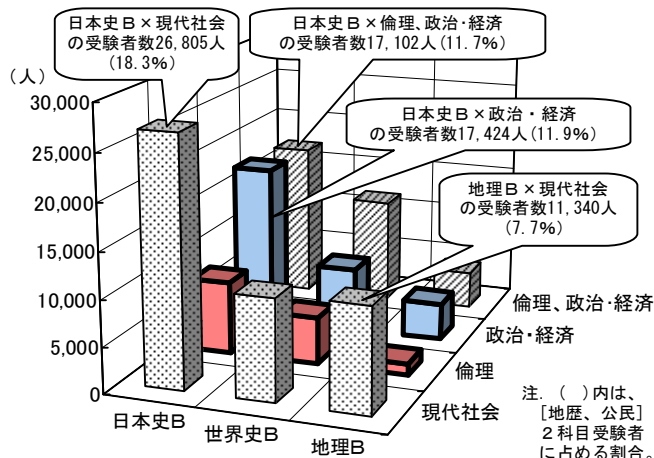
		公 民			
		現代社会 (人)	倫 理 (人)	政治・経済 (人)	倫理、 政治・経済(人)
地	日本史B	26,805 (18.3%)	7,895 (5.4%)	17,424 (11.9%)	17,102 (11.7%)
	世界史B	10,982 (7.5%)	5,081 (3.5%)	6,887 (4.7%)	11,602 (7.9%)
歴	地 理B	11,340 (7.7%)	1,246 (0.9%)	4,009 (2.7%)	4,082 (2.8%)

②「地歴A科目」×「公民」受験：1,832人(1.3%)の内訳

		公 民			
		現代社会 (人)	倫 理 (人)	政治・経済 (人)	倫理、 政治・経済(人)
地	日本史A	475 (0.3%)	94 (0.1%)	287 (0.2%)	32 (0.0%)
	世界史A	207 (0.1%)	46 (0.1%)	112 (0.1%)	27 (0.0%)
歴	地 理A	344 (0.2%)	42 (0.0%)	146 (0.1%)	20 (0.0%)

注。()内は、[地歴、公民]2科目受験者に占める割合。

● 「地歴B」 × 「公民」 受験者の内訳 (追・再試験含む)



(2) 「地歴」 2科目受験 : 約 1万7,000人、11.9%

24年セ試から導入されている、地歴と公民の「試験枠」統合の要因にもなった「地歴」2科目受験については、受験者が28年より836人(前年比5.0%)増の1万7,444人([地歴、公民]2科目受験者に占める割合11.9%)である。

また、「地歴B」科目同士の2科目受験者は、28年より852人(前年比5.2%)増の1万7,103人([地歴、公民]2科目受験者に占める割合11.7%)に増えた。

「地歴」2科目受験による科目の組合せは、12通りになる。

科目別の組合せでは、日本史Bと世界史Bの組合せが6,804人([地歴、公民]2科目受験者に占める割合4.6%) / 世界史Bと地理Bの組合せが6,828人(同4.7%)のほか、日本史Bと地理Bの組合せが3,471人(同2.4%)となっている。

① 「地歴B科目」 × 「地歴B科目」 受験 : 17,103人(11.7%)の内訳

		地 歴	
		世界史B (人)	地理B (人)
地	日本史B	6,804 (4.6%)	3,471 (2.4%)
	世界史B	—	6,828 (4.7%)

注. ()内は、[地歴、公民]2科目受験者に占める割合。

② 「地歴A科目」 × 「地歴A科目」 受験 : 131人(0.1%)の内訳

		地 歴	
		世界史A (人)	地理A (人)
地	日本史A	59 (0.0%)	36 (0.0%)
	世界史A	—	36 (0.0%)

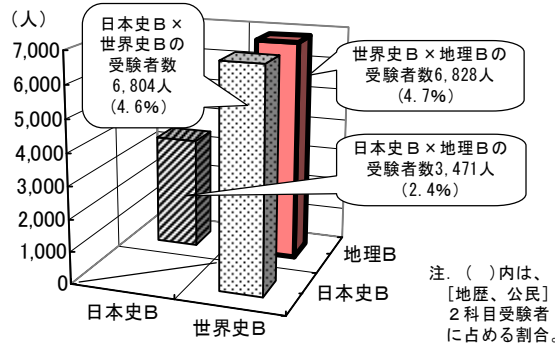
注. ()内は、[地歴、公民]2科目受験者に占める割合。

③ 「地歴A・B科目」 × 「地歴A・B科目」 受験 : 210人(0.1%)の内訳

地 歴	A・B科目	受験者(人)
日本史	A科目 × 世界史B	37(0.0%)
	B科目 × 世界史A	51(0.0%)
世界史	A科目 × 地理B	42(0.0%)
	B科目 × 地理A	29(0.0%)
地 理	A科目 × 日本史B	32(0.0%)
	B科目 × 日本史A	19(0.0%)

注. ()内は、[地歴、公民]2科目受験者に占める割合。

●「地歴B」2科目受験者の内訳（追・再試験含む）



(3) 「公民」2科目受験：約2,800人、1.9%

「公民」同士2科目の組合せは4通りで、受験者は28年より402人(前年比12.6%)減の2,787人([地歴、公民]2科目受験者に占める割合1.9%)である。

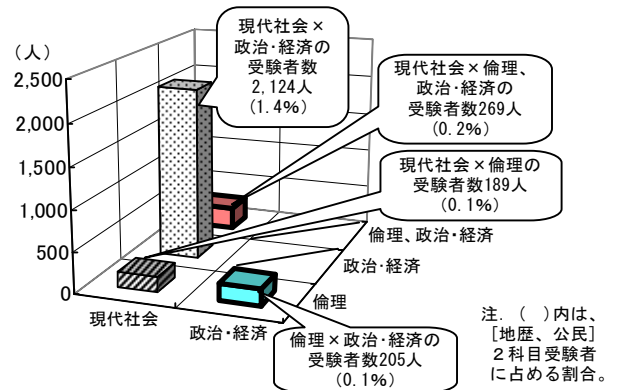
科目別の組合せでは、現代社会を基軸に、政治・経済との組合せが2,124人(同1.4%)／倫政経との組合せが269人(同0.2%)／倫理との組合せが189人(同0.1%)などである。

●「公民」4科目から2科目受験：2,787人(1.9%)の内訳

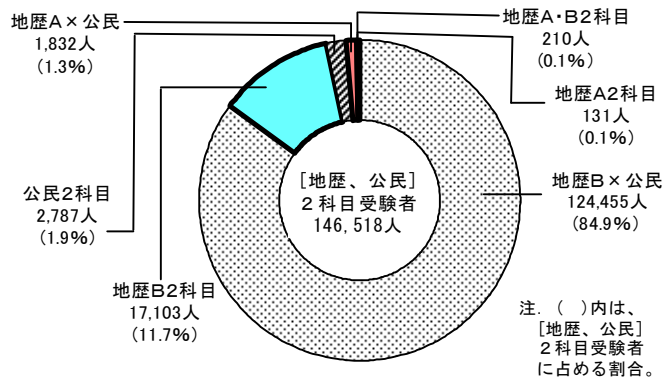
	公民		
	倫理 (人)	政治・経済 (人)	倫理、政治・経済 (人)
公民	189 (0.1%)	2,124 (1.4%)	269 (0.2%)
現代社会	—	—	—
政治・経済	205 (0.1%)	—	—

注：（ ）内は、[地歴、公民] 2科目受験者に占める割合。

●「公民」2科目受験者の内訳（追・再試験含む）



●[地歴、公民] 2科目受験者の内訳（追・再試験含む）



■ **理科**；「基礎科目」受験者約 15 万 6,000 人、「発展科目」受験者約 24 万 7,000 人！
「選択パターン」別受験者比率：A=36%、B=9%、C=5%、D=51%！

□ 「理科」の選択解答方法

27 年から現行課程に対応して先行実施された「理科」は、物理・化学・生物・地学の 4 領域の各「基礎科目」（標準 2 単位）を理科①に、各「発展科目」（標準 4 単位）を理科②に配置し、全 8 科目を次のような A～D の“4 パターン”のいずれかによって選択解答する。

- A = 「基礎 2 科目」：物理基礎、化学基礎、生物基礎、地学基礎から 2 科目選択解答。
（4 単位相当）
- B = 「発展 1 科目」：物理、化学、生物、地学から 1 科目選択解答。（4 単位相当）
- C = 「基礎 2 科目 + 発展 1 科目」：物理基礎、化学基礎、生物基礎、地学基礎から 2 科目、及び物理、化学、生物、地学から 1 科目選択解答。
（3 科目選択解答：8 単位相当）
- D = 「発展 2 科目」：物理、化学、生物、地学から 2 科目選択解答。（8 単位相当）

◎ 選択解答の留意事項

- 「発展科目」については、旧課程で“選択履修”であった学習項目が現行課程では“必修化”されたが、受験者の大幅な負担増にならないように“一部に選択問題”が配置されている。
- 理科①(基礎科目：50 点満点)については、“1 科目のみの受験は認められない”。
試験時間は 2 科目で 60 分。
- 理科②(発展科目：100 点満点)の試験時間において 2 科目を選択する場合、解答順に「第 1 解答科目」及び「第 2 解答科目」に区分して各 60 分間で解答する。「第 1 解答科目」と「第 2 解答科目」の間の答案回収等の時間を含め、合計時間(130 分)が試験時間となる。
- 選択解答方法(A～D)は、出願時に「事前登録」する。
- 選択解答方法 C における「基礎科目」と「発展科目」の組合せで、同一名称を含む科目同士の選択については制限されず、同一名称を含む科目同士の選択は可能である。
ただし、セ試を利用する大学(学部)によっては、「基礎科目」と「発展科目」における同一名称を含む科目の組合せを不可としているところがある。
因みに、地歴と公民では、同一名称を含む科目の組合せで 2 科目選択はできない。

□ 受験者の動向

◎ 理科①の受験状況

(1) 「基礎科目」受験者：約 15 万 6,000 人、「理科」受験者の 40.6%

理科①の「基礎科目」の実受験者数は 15 万 6,481 人で、理科の実受験者数 38 万 5,826 人(A～D パターンの受験者合計)の 40.6%である。

29 年の「基礎科目」の実受験者数は、前年に比べ 4,010 人、2.6%の増加となった。

ところで、28 年は、27 年の「経過措置」（旧課程履修者用に旧課程のセ試「理科」科目が理科②の試験枠に配置。27 年のみ実施）で旧課程科目を受験した“文系志望者に相当する層”が「基礎科目」を受験したため、27 年に比べ約 2 万 2,500 人(17.4%)の大幅増となった。

29 年は、セ試受験者数の増加(前年比 2.1%増)にほぼ見合った増加である。

(2) 「基礎科目」の科目別選択率：生物基礎 43.5%、化学基礎 35.1%

理科①の「基礎科目」の延べ受験者数 31 万 3,027 人の受験状況は、次のとおりである。

生物基礎は受験者数 13 万 6,229 人、理科①の延べ受験者数に占める割合 43.5% / 化学基礎は 10 万 9,850 人、同 35.1% / 地学基礎は 4 万 7,527 人、同 15.2% / 物理基礎は 1 万 9,421 人、同 6.2% で、「基礎科目」受験は生物基礎と化学基礎が中心となっている。

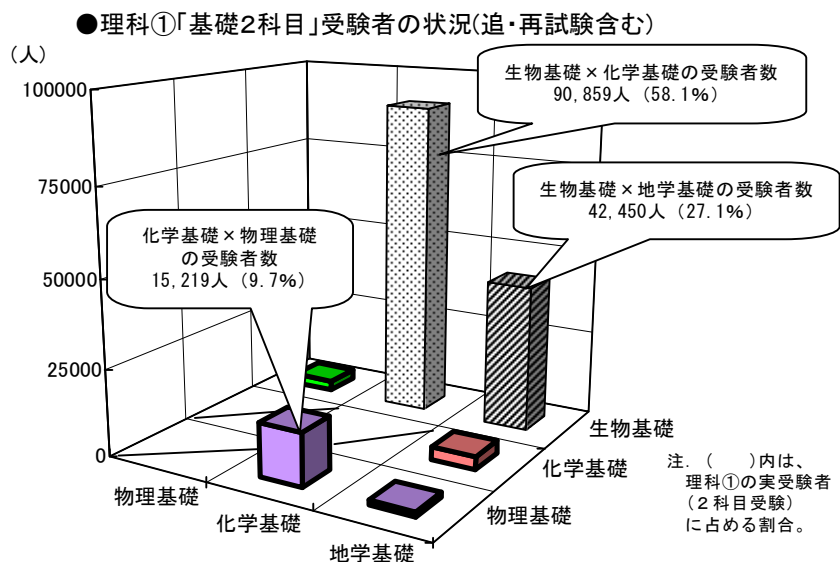
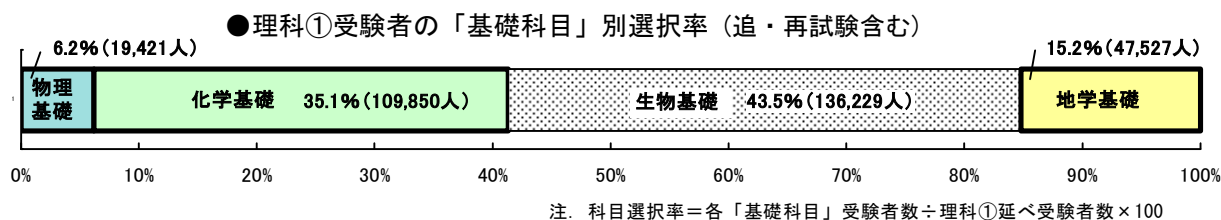
(3) 「基礎 2 科目」の組合せ：

「生物基礎＋化学基礎」58.1% / 「生物基礎＋地学基礎」27.1% など、“文系色” 反映！

「基礎科目」は“2 科目受験が必須” となっており、受験科目の組合せ状況は、次のとおりである。

「生物基礎＋化学基礎」は受験者数 9 万 859 人、科目選択率 58.1% (理科①の実受験者数に占める割合) / 「生物基礎＋地学基礎」は受験者数 4 万 2,450 人、同 27.1% / 「化学基礎＋物理基礎」は受験者数 1 万 5,219 人、同 9.7% など。

「基礎科目」は、生物基礎を中心に化学基礎や地学基礎との組合せが主体で、“文系志望者” 受験を反映した結果となっている。



●理科①：「基礎 2 科目」受験者数 156,481 人の科目選択内訳（追・再試験含む）

	理科①			
	物理基礎(人)	化学基礎(人)	生物基礎(人)	地学基礎(人)
理科① 物理基礎	—	15,219 (9.7%)	2,877 (1.8%)	1,314 (0.8%)
理科① 化学基礎	—	—	90,859 (58.1%)	3,762 (2.4%)
理科① 生物基礎	—	—	—	42,450 (27.1%)

注. ()内は、「基礎 2 科目」実受験者に占める割合。

◎ 理科②の受験状況

(1) 「発展科目」受験者：約 24 万 7,000 人、「理科」受験者の 64.1%

理科②に配置された「発展科目」の実受験者数は 24 万 7,287 人で、28 年の理科②の実受験者数 25 万 438 人に比べ、3,151 人(1.3%)の減少となる。

また、「理科」全体の実受験者数(38 万 5,826 人)に占める「発展科目」の実受験者数の割合は 64.1%で、前年より 1.2 ポイント下回った。

(2) 「発展科目」の延べ受験者の構成比：

「化学」受験 47.3%、「物理」受験 35.4%、「生物」受験 16.9%など、“理系色”反映！

「発展科目」の延べ受験者数 44 万 2,758 人の各科目の構成比率は、次のとおりである。

化学 47.3%(受験者 20 万 9,540 人)／物理 35.4%(同 15 万 6,842 人)／生物 16.9%(同 7 万 4,714 人)／地学 0.4%(同 1,662 人)。

各科目の構成比率を 28 年と比べると、物理が 0.6 ポイント上昇したのに対し、生物が 0.4 ポイント下降、化学と地学がともに 0.1 ポイント下降した。

◎ 「選択パターン」別受験状況

(1) セ試「理科」受験者の“2人に1人”は、「発展2科目」の“Dパターン”！

セ試「理科」は、前述のようにA～Dの4パターンからの選択受験となる。

29 年の各「パターン」別受験者の 4 パターン実受験者数 38 万 5,826 人に占める割合は、次のとおりである。

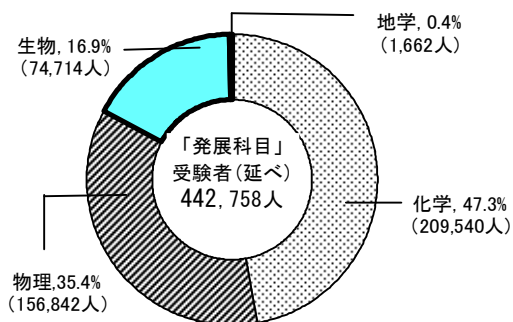
Aパターン：35.9%(受験者数 13 万 8,539 人)／Bパターン：8.8%(同 3 万 3,874 人)／Cパターン：4.7%(同 1 万 7,942 人)／Dパターン：50.7%(同 19 万 5,471 人)。

Aパターンの受験者数が前年より 5,196 人(3.9%)増え、セ試「理科」受験者に占める割合も 1.2 ポイント上昇したが、他のパターンは全て前年より受験者数減となり、「理科」受験者に占める割合も低下した。

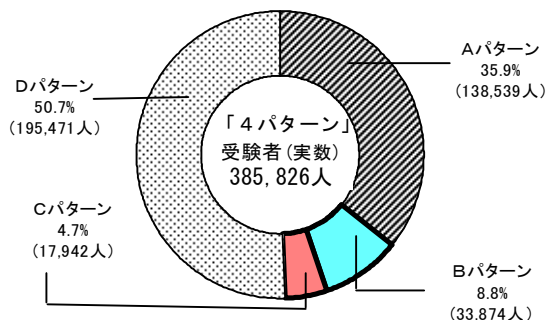
ただ、前年同様、セ試「理科」受験者の“2人に1人”が「発展2科目」(8単位相当)の“Dパターン”を受験していることは変わらない。

また、看護・医療系などにみられる“Cパターン”(基礎2科目+発展1科目：8単位相当)は前年より 0.3 ポイント下降し、4.7%に留まっている。

●理科②「発展科目」延べ受験者の構成比率
(追・再試験含む)



●理科「選択パターン」別受験状況
(追・再試験含む)



(2) A : 「生物基礎＋化学基礎」主体 / B : 物理、化学、生物の1科目選択比率ほぼ“均等”
 C : 「生物基礎＋化学基礎＋生物」主体 / D : 「化学＋物理」主体

A～Dの各パターンの科目選択の内訳をみると、およそ次のようになっている。

Aパターンは、「生物基礎＋化学基礎」が60%近くで主体/Bパターンは物理(約36%)、化学(約32%)、生物(約32%)の1科目選択比率がそれぞれ30%台でほぼ均等/Cパターンは、「生物基礎＋化学基礎＋生物」が40%強で主体となっている。また、Dパターンは「化学＋物理」が70%強、「化学＋生物」が30%近くである。

●Aパターン：実受験者数138,539人の科目選択内訳（追・再試験含む）

		理 科 ①			
		物理基礎(人)	化学基礎(人)	生物基礎(人)	地学基礎(人)
理 科 ①	物理基礎	—	10,017 (7.2%)	2,192 (1.6%)	1,166 (0.8%)
	化学基礎	—	—	80,332 (58.0%)	3,379 (2.4%)
	生物基礎	—	—	—	41,453 (29.9%)

- 注. ① 理科①(基礎科目)から2科目を選択受験。
 ② ()内は「Aパターン」の実受験者に占める割合。
 ③ 太枠、網かけの枠は“選択比率の高い”科目の組合せを示す。

●Bパターン：実受験者数33,874人の科目選択内訳（追・再試験含む）

理 科 ②			
物 理(人)	化 学(人)	生 物(人)	地 学(人)
12,248 (36.2%)	10,785 (31.8%)	10,667 (31.5%)	174 (0.5%)

- 注. ① 理科②(発展科目)から1科目を選択受験。
 ② ()内は「Bパターン」の実受験者に占める割合。
 ③ 太枠、網かけの枠は“選択比率の高い”科目の組合せを示す。

●Cパターン：実受験者数17,942人の科目選択内訳（追・再試験含む）

		理 科 ①					
		物 理 基 礎			化 学 基 礎		生 物 基 礎
		化学基礎(人)	生物基礎(人)	地学基礎(人)	生物基礎(人)	地学基礎(人)	地学基礎(人)
理 科 ②	物 理	2,602 (14.5%)	182 (1.0%)	85 (0.5%)	399 (2.2%)	51 (0.3%)	31 (0.2%)
	化 学	2,173 (12.1%)	372 (2.1%)	43 (0.2%)	2,499 (13.9%)	70 (0.4%)	129 (0.7%)
	生 物	406 (2.3%)	125 (0.7%)	8 (0.0%)	7,568 (42.2%)	225 (1.3%)	565 (3.1%)
	地 学	21 (0.1%)	6 (0.0%)	12 (0.1%)	61 (0.3%)	37 (0.2%)	272 (1.5%)

- 注. ① 「理科①(基礎科目)から2科目＋理科②(発展科目)から1科目」の選択受験。
 ② ()内は「Cパターン」の実受験者に占める割合。
 ③ 太枠、網かけの枠は“選択比率の高い”科目の組合せを示す。

●Dパターン：実受験者数195,471人の科目選択内訳（追・再試験含む）

		理 科 ②			
		物 理(人)	化 学(人)	生 物(人)	地 学(人)
理 科 ②	物 理	—	139,612 (71.4%)	1,177 (0.6%)	455 (0.2%)
	化 学	—	—	53,603 (27.4%)	254 (0.1%)
	生 物	—	—	—	370 (0.2%)

- 注. ① 理科②(発展科目)から2科目を選択受験。
 ② ()内は「Dパターン」の実受験者に占める割合。
 ③ 太枠、網かけの枠は“選択比率の高い”科目の組合せを示す。

□ 「理科」平均点

◎ 化学は3年連続ダウンで“過去最低”／物理基礎は4.7点ダウンで“過去最低”／生物基礎は11.9点アップで“過去最高”！

文系志望者の受験が多い「基礎科目」の平均点(50点満点)を得点率でみると、物理基礎59.4%、化学基礎57.2%、生物基礎78.9%、地学基礎65.0%である。

前年高得点の物理基礎(28年：34.4点、得点率68.7%)の4.7点のダウン(得点率9.4ポイント下降)と、生物基礎(28年：27.6点、得点率55.2%)の11.9点の大幅アップ(得点率23.8ポイント上昇)が目立つ。

他方、各「発展科目」の平均点(100点満点)と前年差は、次のとおり。

物理62.9点(+1.2点)、化学51.9点(-2.5点)、生物69.0点(+5.4点)、地学53.8点(+15.1点)である。

● 化学の平均点＝過去最低：

平成2年のセ試開始以来、化学(発展科目。化学I B、化学Iを含む)の平均点は50点台～60点台を維持しているが、25年63.7点→26年69.4点→27年62.5点→28年54.5点→29年51.9点と3年連続ダウン。その結果、29年はこれまで最低だった6年の52.1点を下回り、過去最低となった。

● 物理基礎の平均点＝過去最低：

「基礎科目」(50点満点)は27年の実施開始から3回目と実施回数は少ないが、物理基礎の平均点は、27年31.5点(得点率63.0%)→28年34.4点(同68.7%)→29年29.7点(同59.4%)と推移しており、29年は過去最低である。

なお、9年～17年(18年の「経過措置」除く)まで実施された物理I A(2単位相当。100点満点)では、15年の60.8点が最低であった。

● 生物基礎の平均点＝過去最高：

「基礎科目」の生物基礎の平均点は、27年26.7点(得点率53.3%)→28年27.6点(同55.2%)→29年39.5点(同78.9%)と推移し、29年は過去最高である。

因みに、9年～17年(18年の「経過措置」除く)まで実施された生物I A(2単位相当。100点満点)では、14年の69.4点が最高であった。

□ セ試「理科」受験の傾向

27年から先行実施された現行課程のセ試「理科」は、その受験方法などが多様化、複雑化した。今回で3回目となり、受験者の動きも定着してきたようだ。

29年セ試「理科」の実受験者数は全体で前年比0.5%増に留まり、セ試受験者数の2.1%増には及ばなかったが、「基礎科目」は2.6%増で、各科目とも受験者増。一方、「発展科目」の実受験者数は前年比1.3%減で、物理の0.6%増を除き、各科目とも減少した。

こうしたことから、例えば看護・医療系(「基礎2科目」または「発展1科目」の選択指定が多い)の志望者による「発展1科目」受験から「基礎2科目」受験への切り替えなどで「基礎科目」受験者の増加につながり、「発展科目」は「物理」受験者の増加などで一段と理系色が強まっていることが伺える。